

教えから学びへ

—教育にとって一番大切なこと—

しおみとしゆき
汐見稔幸 著

著者は、保育幼児教育から大学教育までの幅広い実体験に基づく教育学者であり、東京大学名誉教授として現在も幅広く活躍されている。

これまでの教育に関する議論は、圧倒的に教える側のものが多く、教育学も「何をどう教えると効果が高いか」などの研究が主体である。

しかし、これからは「教え」から「学び」への発想の転換が必要だと指摘し、教育は「学ぶ力を豊かにし、深くする」ことを重視すべきとして、各章とも課題ごとに要点を分かり易くまとめている良書である。

第1章「なぜいま教育がいきづまっているのか」では、「GIGA」スクール構想の一事例として、端末の活用にあたって「先生に指示されたところ以外は絶対に触ってはいけません」などの指導法では新しい学びは生まれないと指摘している。

第2章「教えの教育から学びの教育」では、我が国の戦後教育の流れをたどりながら、現在では大抵のことはインターネットから知ることができるので、これからの教育では、「教師が知識をどう教えるか」ではなく、「子どもたちの学びをどう育てるか」を重視すべきとしている。

さらに、国連サミットで採択され2030年までの達成目標である「SDGs」を教育現場で積極的に取り組む意義についてもまとめている。

第3章「学びと教養」では、学びとは脳の中に情報処理の回路が新しくできることと定義し、「わかる」ということはどういうことかを事例をあげて解説している。

また、「教養」については、「分化した知識をつなぎ直す」こと、「関心の発展システムである」

こと、「全体との関係で自分を位置付ける」こととし、いろいろな知識をより上位の知識につなげていく姿勢だと述べている。

第4章「学びは体験から始まる」では、「アクティブ・ラーニング」について、「ハイハイ!」と積極的に手を挙げる子は深い学びをしているのかと指摘し、「手をあげることなく教師の話聞いて考えている子、じっと教科書を見つめ考えている子」など、その子なりのやり方で学んでいる子もいることを認識すべきとしている。

第5章「学びを支えるための教育」では、「学びのスキルを身に付け、自らの知識を責任ある形で活用する能力の育成」が世界の学校教育では重視されているとし、「認知的スキルとしては、読む力、書く力、計算力、批判的思考力、問題解決能力、創造的思考力」、「非認知能力としては、忍耐力、自制心、責任感、好奇心、精神的健康」などが紹介されている。

第6章「学びは続くよ、どこまでも」では、語義の世界、つまり客観的な知識は、時代とともに変わり続け、現時点で正しいと思えることでも、後に覆されることがよくあり、江戸時代の士農工商の身分制度も最近では職能分担に過ぎず、武士身分はお金で買ったことがわかってきたと紹介している。また、学びが起るきっかけとなる「問い」に真摯に親や教師が寄り添うことの大切さについても述べている。

さらに、異学年生と一緒に学び合う時間の設定や正解がない中で「自分なりの解」を作ることの楽しさや面白さを体験させることも学校の役割だとも指摘している。また、学びの場をもっと地域に開いていくことを求めている。

著者は、本書の最後で、読み終わったあなたにとって「学びや教育」の意味は変わったかという問い、「自身の学ぶ姿、行動する姿」を子供たちに見せていただきたいと締めくくっている。

(河出新書, 250頁, 979円(税込)) (山下省蔵)